

日本における S. Smiles『自助論』受容の 思想史的研究 (I)

藤 原 暹

は じ め に

先に明治期における江戸洋学観の展開を考察した際、福沢諭吉の把握はやがて明治20年代以後の生活主義（産業社会の形成とその生活への国民的自覚）と共に批判され、その洋学観も変更を余儀なくされることを指摘した。この傾向をいみじくも別の側面で示しているのは S. Smiles の *Self-help* (1859) の受容と展開であると考えられる。

というのは、周知の如く福沢諭吉の『学問のすすめ』と並んで、明治青年の愛読書は *Self-help* の日本語訳中村正直（正直）の『西国立志編』であり、しかも次に引用するように両書は明治20年代に対照的な受けとめられ方をするからである。

『学問のすすめ』の発行部数は明治十年までには約六十五万部であるが、明治十三年までは約七十万部とその伸びが落ちており…一方『西国立志編』は明治二十年前後数種の異版が現われて一つのピークをつくり大正年間までベストセラーの地位を維持する。『立志叢談』（明26）の中村正直の項には「彼ノ学問之勦ハ今ヤ既ニ其声ナシト雖モ西国立志編ハ今猶声アリテ学生ノ口頭常ニ喋々トシテ絶ユルコトナシ」とある¹⁾。

本稿は日本における産業社会の生活の自覚過程に於てその思想的機能を発揮した *Self-help* とその受容形態を考察するものである。その際に、翻訳の系譜上に現われる問題と翻案の過程に発見される問題と少なくとも二面の考察が必要である。この点本稿は翻訳上の問題にしぼり、中村正直訳→畔上賢造訳→小山内薫・中村徳助共訳の流れを設定した。従来の研究で畔上訳本は注目されていないがこれは重要である。なお翻案の過程としては『日本立志編』の出版、国木田独步「非凡なる凡人」の執筆、更に『日本自助論』の成立や新渡戸稲造の『修養』への投影など考えられるが紙数の関係で別に発表する²⁾ ことにした。

1 S. Smiles と *Self-help*

Sumuel, Smiles (1812-1904) については明治41年12月出版の鶴田賢次著『自助論の著者 スマイルス翁の自伝』（博文館）³⁾ があり、柳田泉氏の『西国立志編』（富山房）⁴⁾ の

1) 前田愛氏「明治立身出世主義の系譜」『文学』33巻4号。

2) 「日本における生活意識と人間性Ⅲ」『生活学 VIII』ドメス出版 昭和57.12 予定。及び『文芸研究』102集 昭和58.1 予定。

3) 明治41年12月発行。

4) 『富山房百科文庫 18』昭和13年、のち再版。

解説が有名である。柳田氏の解説が優れたものとして受けとられてきた理由の一つは、作者、スマイルズの自立と思想が、その著『自助論』に反映し、両者が相関的關係にあることを提示した点にあらう。この視点は『自助論』の内容とスマイルズの伝記を比較すれば容易に首肯し得るところである。しかし、いくつかの重要な思想的問題について十分に論及されているとは言い難い。そこで両者の關係を中心に『自助論』そのものの有する思想を考えてみる。便宜的に、原書⁵⁾の目次を掲げ、どこにスマイル自身の自立や思想が反映しているのかをまず指摘する。

<i>Contents</i>	自 伝 記 事
Preface by Samuel Smiles to the edition of 1859 & 1866	リーズの青年への講演
I Self-Help : National and Individual	全時代
II Leaders of Industry : Inventors and Producers	鉄道会社勤務
III Three Great Potters : Palissy, Böttgcher, Wedgwood	
IV Application and Perseverance	リーズタイムス時代
V Helps and Opportunities : Scientific Pursuits	医学修業時代
VI Workers in Art	少年時代
VII Industry and the Peerage	
VIII Energy and Courage	少年時代
IX Men of Business	鉄道会社勤務
X Money : Its Use and Abuse	
XI Self-Culture : Facilities and Difficulties	少年時代
XII Example : Models	母の感化
XIII Character : The True Gentleman	<i>Character</i> (1878) 執筆

自伝の記事と関連する『自助論』の内容を少年時代からスマイルズの自立の過程に従って述べてみる。

まず彼の父はスコットランドのハディントンで「手造り紙製造」を営む職人で後に雑貨屋を開くつましい暮しであった。

外套や絨布を店先に並べて小農民などに売って生活を立てていた。母は「暇があれば、何時も糸車を廻していた⁶⁾」それでリンネルを編み家族に供した。食卓に欠かせぬ牛乳は庭の隅の牛小屋で牛を飼って賄った。いわば自活自営的で「極貧のために苦しむ程では無かったが、然し又富有なるが故に却って其抑圧を蒙る程でもなかった。当時国税は殊の外に重く、又日々の食料もナカナカ高かったのに優に一家を養って行かれた。」⁷⁾

小学校時代はあまり勉強好きな子供ではなく、ハルディという先生からは「貴様は役に立たぬ奴だ。ドウセ故郷の町掃除人位だぞ」と怒られていた。後年スマイルズ自身が、自分が何等かの社会的成功と貢献をなしたとすれば、それは、抜群の才能の持主でなく、活

5) 本稿では Centenary edition published by John Murray 1958 年版を主として用いた。

6) 前掲 鶴田著 15 頁。

7) 同上 17 頁。

動的で非常な強健な身体と辛抱の気性の持主であったためと述べ、「生き生きした生活は運動より来るが、それは田舎住ひしていた仕合せによる」と少年期に感謝している⁸⁾。『自助論』の第十一章に「学士アーノルド曰ク童子ノ互ニ優劣アルハ才能ニヨルコト少ナク、勢力ヲ用ウルニヨルコト多シ」と断定され、更に

コノ書ヲ著セルスマイルズワカキトキ学校ニ在リシトキ、極メテ魯鈍ナリシガ、ホカニ一個ノ童子アリテ同ジク同等ニ居レリ……コノ童子愚鈍ナリトイエドモソノウチニ一種心志ノ力ヲ具エシユエニ年ヨウヤク加ワリ筋骨ノ長ズルニ從イ心志ノカマスマス強ク人生ノ職事ヲ荷ウニ及ンデ学校ノ同輩人ヲ超過シテ首位ニ近ズクコトヲ得、ソノ後ツイニソノ故郷ナル地方ノ官長トナレリ⁹⁾。

と記している。つまり身分や才能によらず努力と意志により自立する事を述べる。これは第八章のにも関係する。次にスマイルズは少年時代、「ペインターになりたい」希望をもっていた。「ペインター」を Artist の意に彼は使用して母に告げると、「あれは汚い稼業だよイケないネー」と反対された¹⁰⁾。しかし絵画や彫刻についての彼の関心は終生変わらず、第六章に結晶している。

’26年12月 Dr, リューウィンスの学僕となり「薬剤の性質を記憶えたり、調剤を習ったり、丸薬、水薬、軟膏、発胞膏、注射剤、チンキ等の製造法を教えて貰ったりした」生活の後、三年目にしてエディンバラ大学の医科の講義を聞く事ができるようになる。ここで身につけた自然科学の知識や方法は第五章などの執筆に影響を与えている。

’32年1月第三学年期の始業と同時に父がコレラで急死する悲運に会う。「家族の糊口の途」を考え医業の修業を断念しなければなるまいと思ったが、母はどうしても大学に戻って学業を継続するように勧めた。そして“God will provide”と言った。「母は元来コヨ無く天帝を信仰して居られた人で此際其加護の下に立ちながら自身心一心不乱になって母親たる者の職分を尽すならば全家を支持することは出来るに違ひ無いと固く思ひ込んで居られた」と彼は述べ¹¹⁾ この「母の靈感を受けて」再び医学修業に戻った。’32年11月 医師免許証書を受けた。学僕となって六年目に当たっていた。

この母から受けた感化は第十二章で「ウェスト、バクストン等ソノ母ニ感化セラレシコト」他に反映する。

かくして、スマイルズはハディントンで医者を開業した。当時、ハッディレトンでは八人も開業して居て「自分は其中で最も若カ手であった」「零碎（オチコボレ）の病人があらはあって自分はソレを引受けて遣りは遣ったが卒ネ貧乏人であった」。仕事は「実に不

8) 前掲 鶴田著 20頁。

9) ここでは中村正直訳『西国立志編』講談社版 昭和56年1月460頁を使用した。

10) 前掲 鶴田著 64頁。

11) 同上 29-30頁。

規則で二夜も三夜も続いて眼りに就くことの協はぬ時があるかと思うと、為すべき何んの用すら無い日もあった」閑暇な時には語学を学び、ヴァイオリンを習ひ、詩歌を読んだが、重要な企ては著述を目論んだことである。]¹²⁾

ここに「閑暇」を利用し趣味を伸ばす工夫特に「著述」への基礎が形成された。この事は『自助論』執筆へのきっかけを与えると共に『自助論』内容に多くの著述家の業績を紹介することにもなった。'38年11月、26歳で『リーズタイムス』の編集業務についた。

彼がここで直面した政治状況については、Prof. A.ブリッグスの“In 1838 English politics were in an interesting and exciting phase”以下の叙述が¹³⁾ 当を得ている。

つまり、経済不況を背景に Businessmen は財政政策の変更を、Workingmen は普通選挙権を要求し不穏な動きはロンドンのみならず地方特に北部イングランドに及んでいた。この間にあってジャーナリストは情報の提供と卓越する意見とをもった“Strategic position”にあった。リーズにおいて、*The Leeds Times* は *Whig mercury* と *Tory · Intelligencer* のみならず *Chartist · Northern star* とともに競り合っていた。医学用のメスをハサミと糊壺に代えたスマイルスの日常は集めたおびただしい切抜きをもとにした「毎週約そ四欄の論説の外、準論説や雑事…出版物の批評…通信、応答などに掛っているとそれぞれ時間は殆どいっぱいであった。』¹⁴⁾

1838年にスマイルスが立っていた思想はシェフィールドの“Corn-Law Rhymer (米穀条例詩人)”と言われた Ebenezer, Elliot と同様であった。彼は鉄や鋼鉄の商売を営むかたわら詩人であり、パン税反対の過激な詩を発表した当時の Robert Burns であった。彼等はこの税が市の労働者の生活や市の営業を衰退させるもので天道にも人道にも背けるものとみた。

chartism (人民憲章運動) に共感を抱いていたが、physical force の行使や chartist Readers の煽重には同調しなかった。普通選挙権の拡大や教育によって国民の““Levelling up”や“improvement”がなり立つと信じていた。社会的特権について不平をもつ中間階級や労働者の統一を絶え間なく試みた¹⁵⁾。

この教育による中間階級や労働者の向上という思想は『自助論』の中に大きく反映している。

さて、スマイルス自身「顧みれば '43 年こそは最も酷く働いた年である」と述懐する如く、新聞の仕事以外にアイルランドの歴史に続いて「イギリスの共和政治時代と其時代人物」と題する著作にとり掛った。またこれをリーズの工作人協会と文学会で演述した。

ところがこの間にスマイルスには「操觚の業を以て杖ぐらいにしても、クラッチ(松葉杖)とは為まいと考え」だしていた。つまり職業を換えようとしていたのである。この時

12) 前掲 鶴田著 37頁。

13) 前掲 1958年版 A centenary introduction p. 12.

の「変える」意志について自伝の抄録者鶴田賢次はかなりの行数を使ってその意味を追認しようとしている¹⁴⁾。しかし、スマイルスには時間的余裕と自ら価値あるものに没頭したい気になったという事もあるであろう。

'45年に The Leeds and Thirsk Railway の書記に転じた。この転換について, Prof. A.ブリッグスは,

Railways not only provided him with his livelihood and his leisure occupation —writing the Life of Stephenson—but great symbolic importance in the evolution of his own and his country history. The creation of a national rail way system was the great dividing line in nineteenth-century Social history.¹⁵⁾

と述べているが、まさにスマイルスと当時の社会に鉄道は大きな転換を与えたのである。著述についての基礎は *Edinburgh Weekly Chronicle* から *Leeds Times* を通して形成されたが、著作の中で何に point をおくかはここに決定された。これが第二章で示される。

つまり、“Railway system” が国家財政や国民結合を助長したと同様に、技術者を社会の英雄として捉え、物質的進歩の勝利とした。そう解することによって、労働者や貧しい人々の日常生活を通して “Well-informed” “Well-codition” を形成する道を示した。

こうした中で '45年ウィリアム・ハウィットとジョン・サウンダースの発刊した『平民雑誌（ピープルスマガジン）』に「掖済協会（ベネフィットソサエティ）と教育」,「製作場の女工」,「公衆の娯楽及び気晴し」等載せ,「公共図書館設立案」などの国民教育論を唱えた。

'45年3月, リーズの青年相互改良会の代表者の訪問をうけ講演を依頼された。コレラ病院の旧跡を借り受け夜間に集まって勉強していた百名程の青年に行った講演はスマイルスの名声を世界に広めた『セルフヘルプ』を後に誕生させることになった。

この講演で、彼は「先づ、エライ人々の実例を引用し来り、彼等が一通りならぬ困難を凌ぎ、性来の腕前と勇氣とに依って遂に其生国の名声を世界に掲げ文学に理学に技芸に商業に之を進歩させた模様を示した」¹⁶⁾。そして次のような諸点を説いた。これは、彼自らの人生により導かれた経験的哲学の一つの結晶と思われ、『セルフヘルプ』の初版の序と再版の序に明確に反映している。

1. 「以上の諸例を覧ると、ソレ等の人々は自修の力に依り、貧困の境遇から抽けて遂に或はエライ地位に昇り、或は許多の財産すら積んだ。然ればそういふ風にするこそ人生主要の目的であるなどと考える様になるかも知れないが、余は諸君の中で一人でも、

14) 前掲 鶴田著 52～59頁。

15) 前掲 1958年版 p.14.

16) 前掲 鶴田著 110～118頁。

ソナな考えを抱かれぬことを希う者である。知識を磨くは今日の低い地位から、他日の高きに達せんとする手段に過ぎぬなどと思惟するは大間違の料見であると思はれる」。

2. 「労働者仲間の教育を謀るは、ソレで天才ある聡慧な輩数名を社会の上流に昇らせようというのでは無く、…幾万の人々をしてソレソレに有徳でありソレソレに聡慧でありソレソレに有徳である様にならせ尚進んで快樂と幸福の新根源とも謂ふべき知識を有たせようというのである」。
3. 「吾がイギリス国の信を墜す事が一つある。吾が国ではナル程今日山に海に多大の富を開拓している。然し国民の心に幾何の富を開拓して居る乎といふに見る影も無い位ではない乎。…民衆が汚卑蒙昧であつては、製造の方法手段がドレ程に完備して居ろうとも誇るに足らぬ。…国民が有識であり有徳であるが上に確乎な品性を具へて居るのこそ実に本当の繁栄本当の進歩を造り出すべき根源である」。
4. 「人の人たる (Man as Man) といへる念慮は甚だ肝要なものと認められるゝようになり深く現代の人心に秘み込んだ。人として人が斯の世に在る間は為すべき事と履むべき道とがある。…何人にも教育の恵を受け得られる機会と方便とを授けて遣り、ソレで万物の霊たる者に備はれる性と知と能との残らずを遺憾なく発揮させる様に為たいといふ念慮である」。
5. 「余は断乎として主張するが、吾等は日々勞役する以外に相当の暇間を見出し得て、吾等が心を磨きもし、又吾等が身を健かにすることを図らねばならぬ。一考える暇間、読む暇間、楽しむべき事共を楽しむ暇間一是等の暇間は人として人が斯の世に生存して居る中宜しく授けられるべき、又宜しく享くべきものなのである。

ここで自立は「人の人たる」存在の勤めと考えられており、その限り世俗的達成自体が重要な^Gのではなく、人間としての品性の向上が目的とされた。

以上 A~G にわたる主要七点の要素においてスマイルズ個人の体験と『自助論』の内容は相互的に強め合った。こうした『自助論』は記述方法として多くの先人（同時代の人も含み 130 人以上）の「言行」を紹介引用する形をとった。更に「言行録」を読み感化され自立する人の例をも掲げた（第十二章）。かくしてスマイルズの体験の意味が幾多の「言行」によって裏づけられ、また幾多の「言行」に意味を与えて集約された。こうした方法の間から格言・金言の類は「一句の中にあまねく人事成敗の実験を包蔵¹⁷⁾」した真理と確認されると共に、「人の言行、将来と必ず相関すること¹⁸⁾」が確信されていたのである。いわば産業革命期における一つの「聖書」であった。

17) 『西国立志編』「第一章」前掲講談社版 55 頁。

18) 同上 「第十二章」486 頁。

2 中村正直と『セルフヘルプ』

中村正直(1832~'91)号を敬字。江戸麻布丹波谷、旗本中村武兵衛の子。嘉永1(1848)年昌平坂学問所に入る。安政2(1855)年同学問所教授方出役を仰付けられる。慶応1(1865)年年末漢英辞書を写す。慶応2(1866)年35歳にて英国留学派遣取締のため出発を仰付けられ10月22日江戸出発、26日出帆。S.スマイルズ『セルフヘルプ』再版出版される。明治元(1868)年4月ロンドンを去り、6月21日帰国。帰国に際し、弗理蘭徳(H. U. フリーランド)より『セルフヘルプ』一冊を贈られる。帰途船中にて読み、帰国後、明治3年10月25日『西国立志編』第一稿成る。以後訳述続行し翌4年40歳にて出版。

彼は『セルフヘルプ』を当時可能な限り忠実にしかも格調ある訳文で記述をなしたことが知られているが、ここでその訳述の跡を追って中村正直の受容の過程を考える。

彼は自著第一編の序に、

謂西国之強由于兵乎。是大不然。夫西国之強。由于人民篤信天道。由于人民有自主之權。由于政寬法公。

と述べ、論に、

余又近読西国古今傑之伝記、觀其皆有自主自立之志、有艱難辛苦之行、原於敬天愛人之誠意、以能立濟世利民之大業、益有以知彼土文教昌明、名揚四海者、実由于其國人勤勉忍耐之力、而其君主不得而与之也¹⁹⁾。

と述べ、平和的な自主自立の西国人民の状況に「天」の意が関与している事を説く。この点、従来の研究は彼が漢学の素養、儒教的思想をもって『セルフヘルプ』を理解したもののと言う。この事は否定できないものと考えられるが、その事が『セルフヘルプ』の意に反する特別の^{マイナス}条件となったとは考えられない。というのは原文自体がすでに述べた如く神(超越者)の摂理を人間の内面性に全面的に及ぼしており、例えば'God'を「上帝」と訳してもその事自体は『セルフヘルプ』受容の支障とは考えられず、むしろ意味を原文に添えたことが考えられる。例えば、

There is, indeed, an essence of immortality in the life of man, even in this world. No individual in the universe stands alone; he is a component part of a system of mutual dependencies; and by his several acts he either increases or diminishes the sum of human good now and for ever. As the present is rooted in the past, and the lives and examples of our forefathers still to a great extent influence us, so are we by our daily acts contributing to form the condition and character of the future. Man is a fruit formed and ripened by the culture of all the

19) ここでは『明治開化文学全集』改造社 昭和6年所収 中村正直訳『西国立志編』第一編序 553-554頁を引用。

foregoing centuries; and the living generation continues the magnetic current of action and example destined to bind the remotest past with the most distant future. No man's acts die utterly; and though his body may resolve into dust and air, his good or his bad deeds will still be bringing forth fruit after their kind, and influencing future generations for all time to come. It is in this momentous and solemn fact that the great peril and responsibility of human existence lies.²⁰⁾

を、

人來世ニ於テ靈魂死セザルノミナラズ、コノ世界ニ於テモ亦タ死セザル本質ヲ存セリ。人ハ宇宙ノ間ニアリテ独り立ツモノニ非ズ。互ニ相ヒ依頼シ關係スルモノハ一分ナリ。而シテ人ノ種々ナル事業ニ頼リテ人類一統ノ幸福ヲ或ハ増シ或ハ減シ永遠無疆ニ及ブコトナリ。現世ノ人世ハ過去ヨリ根ヲ發ス。吾等先祖ノ言行儀範實ニ吾等ヲ感化溶鑄スルコト時代隔ト雖モ尚新タナルガ如シ。コノ理ヲ推セバ吾等今世ニ在テ毎日行フトコロノモノ亦タ將來ノ景象ヲコシラヘシ後世ノ風格ヲ模造スルモノトナルベシ。蓋シ今日ノ人ハ數百年ノ前ヨリ培養ヲ受ケタルモノハ成熟セル果実ナリ。而シテソノ言行儀範磁石氣ノ流行スルガ如ク上ハ千載ノ前ニ接シ下ハ千載ノ後ニ達スル故ニ人死シテソノ身体消散シ土ト化シ氣ニ雜ハルト雖モソノ善惡ノ言行ハ死セズ。各々ソノ種類ニ随ヒテ將來ノ果実ヲ結ビ無疆ニ伝ハルヘシ。サレバ人ノ斯ノ世ニ在ルソノ職任ノ重キコト幾何ゾヤ。ソノ關係ノ大ナルコト幾何ゾヤ。コレヲ思ヘバ凜然トシテ懼レ凜然トシテ戒メザルヲ得ンヤ²¹⁾。

と訳している。ただ彼が儒教的天道の概念をもっていたためにキリスト教的言辭を全てそれで理解したと考えてはならない。

The Almighty stamped on the brow of the first murderer the indelible and visible mark of his guilt, He has also established laws by which every succeeding criminal is not less irrevocably chained to the testimony of his crime,²²⁾

この部分を、

天地開ケテ後始^{ヒトゴロシ}テ凶殺ヲ行ナフ人アリシ時・造物主既ニコノ人ノ額ニソノ罪ノ記号ヲ印シ、又律法ヲ設ケ後來コノ罪ヲ犯カセル人ヲ処シ玉ヘリ。コノ一段文字ニ泥マズシテ意義ヲ了スベシ。²³⁾

20) 前掲 1958 年版 344 頁。

21) 中村正直訳『西国立志編』東京修学堂 明治 20 年版を底本とし、明治 4 年同人社蔵版を対照した。「第十二編 儀範又曰典型ヲ論ズ」引用。

22) 前掲 1958 年版 344 頁。

23) 21) の注に同じ。

と訳してもいる。中村は儒教的要素の適用し得る所は適用し、原文の意を添えていったと考えるべきである。こうした伝統的なものを適用（応用）し生かす工夫はこれまた『セルフヘルプ』の内容に合致するものでもあった。金言、格言が新しい場所に活かされるといふ事もそうだが、現実における勤勉や忍耐もその一つの現われであった。“IV, Application and Perseverance”は中村によって「^{カネツツアル}勤勉シテ心ヲ用フルコト及ビ恒久ニ耐テ業ヲ作スコトヲ論ズ」と訳され²⁴⁾、Application には「勤勉」と「適用」の意をかけている。そしてその各節の題目に「平常ナル工夫」「忍耐ノ工夫」という用語が用いられている。こうした「適用」の認識はまた「習ヲ矯セル事」「光陰ヲ黄金ニ化スル事」など応変内容にも連なった。儒教的要素の状況に対する応変的訳述で身分制度を是とした「人ノ天性」がここでは「人ノ天性甚ダ相ヒ遠カラズ」と工夫、勤勉の前では平等となってくる。またこうした応変性の中で学問も「実事習験ノ学問」性を強く受けとめられる。

With his usual weight of words Bacon observes, that ‘Studies teach not their own use; but there is a wisdom without them, and above them, won by observation’; a remark that holds true of actual life, as well as of the cultivation of the intellect itself.²⁵⁾

を

倍根曰ク尋常書冊上ノ学問ハ人ヲシテコレヲ真実ノ用ニ供セシムルコト能ハズ。又学バザレドモ才智アル人アリ。然レドモ真実有用ノ学ハ独「ヲブスルヴェーション」(実事実物ニ就テ熟観審察スル)ニヨリテカチウルコトナリ。コノ説人生実学ノ要領ヲ握ルノミナラズ又心靈ヲ修養スル道モコレニ外ナルコトナシ²⁶⁾。

と訳され、聖賢の書の読書の学に対して実験実証の近代自然科学が受けとめられる。この延長上に“II, Leaders of Industry”“V, Scientific pursuits”が訳されているのである。またそうした実験実証性が「人生実学」という人間の学として形而上的な領域の基礎であると受けとめている。こうした中村の受けとめは、すでにワットを例にとりて、

互徳 (Watt) ノ新機 (steam engine) ヲ用ヒテ各般ノ工事場益々繁盛ナリシガ ソノ最初ニ顯ルモノハ紡棉工場 (Cotton Manufacture) ナリ²⁷⁾。

とし、

工事ヲ勉強スルヨリシテ生ズル自主自立ノ^{イキナヒ}権ハ全く吾等自己ノ力ニ依頼スルコトナリ。我思フハ邦民ノ勉強シテ工芸 (industry) ヲ為スニ由テ今日ノ如キ昌運 (civilization) ニ至リ光輝ヲ発シタルハ未曾有ノ事ナルベシ²⁸⁾。

24) 21)使用本「第四編」引用。

25) 使用本 p. 39.

26) 21)使用本「第一編」引用。

27) 21)使用本「第二編」引用。

28) 21)使用本「第一編」引用。

と産業革命とそれに伴う社会変革を一応見てとっていた。産業社会を生むものへの対応がある程度理解されていた。

中村の『セルフヘルプ』受容に関して、儒教的禁欲主義による把握が前田氏によって指摘されている²⁹⁾。たしかに「克己」「節儉」「勤勉」「修身」等の徳目は『セルフヘルプ』のそれと合致する。しかし、それは徳目なるが故に守られるべきものと言うよりは、自らの自立を求めて日常生活における自己革新の応変的行為の過程で求められるものであった。儒教的要素も現実の中で変応していくものと中村は考えていたと捉えられる。

ちなみに、中村の「第九編 自序」をみると、

或ひと又曰く、是の書に説く所、孔子の旨に合せり。故に取る可し、と。余曰く……孔子をして今日に生れしむれば、則ち其れ務めて新見異説を聴納する者果して如何ぞや。若し孔子の書を死読し留滞して化せず此れを以て天下の事理を規り、一言合わずんば駭き以て怪と為す。此の如きなれば、則ち学を好んで及ばざる如きの意と正にあい反す。それ学問の事は衆異を集めてもって思察に備へ、旧見を濯いもって新得を冀うを貴ぶ³⁰⁾。

と「留滞して化せざる」事を排しているのである。こうした前提をもって、原文の「第九章」を

重大ノ事務 (Business) ニ任ズル人ハ聰明衆ニ拔キ緊急ノ事ニ臨ンデ速カニコレニ応ズルヲ要ス……狭小ノ人ハ決シテ事務ニ応ズガタキヲ知ルベシ³¹⁾。

と訳し、また

故ニ今世ノ人ハ祖先ノ智識勤勞ニ由リテ學術ノ産業ヲ伝ハリ受クルモノナレバコレヲ補修闡明シテ (not only unimpaired but improved) 後人ニ遺ルベキナリ³²⁾。

と訳しているのである。こうした応変性で産業や科学的概念を一応理解したが、ほとんど訳述できないものがあった。その一つが「生活」(Life) であった。ここでは中村正直訳重版の後、「敬宇先生の『西国立志編』は種々の点より余の翻訳を助けたり³³⁾」という畔上賢造訳『自助論』(明治 39 年 1 月)と、更に畔上訳に影響を受けていると考えられる小山内薫・中村徳助共訳本(大正 1 年)を比較対照しながら考察を進めることにする。まず『自助論』第一章にみられる「生活」という用語表現の翻訳状況について表示すると次の如くである。(畔上賢造 1884~1938。内村鑑三の門に入る。1907 早大文学部哲学科入学、学生時代に本書を翻訳する。)

29) 前掲前田氏論文

30) 前掲講談社本 325 頁。

31) 21) 使用本「第九編」引用。

32) 21) 使用本「第一編」引用。

33) 内外出版協会、明治 39 年、合冊本 例言。

スマイルス原著	中村訳「西国立志編」	畔上訳「自助論」	小山内・中村共訳 「自助論」
life	ナ シ 〈生命〉	p. 2 生活	p. 2 ナ シ
perverted life	ナ シ	p. 4 不正なる生活	p. 4 ナ シ
actual life	ナ シ	p. 9 実際生活	p. 11 実際生活
life	ナ シ 〈作勞〉	" 学問より生活	p. 11 "
high living	〈高潔ノ生涯〉	p. 10 高き生活	p. 11 高尚なる生活
maintaining himself	ナ シ	p. 13 生計を営む	p. 15 生計を支へ
		p. 26 憐れなる生活	p. 26 軍人生活
lived in sheds and fared hardly	ナ シ 〈雨露ヲ凌ぎ〉	p. 26 憐れなる生活	p. 28 むさくるしい生活
an easy and Luxious existence	〈安逸驕後ニ生長スル人〉	p. 30 安逸奢侈の生活	p. 32 ナ シ
truey to get his living	ナ シ	p. 30 真の生活	p. 32 ナ シ
Private and Domestic life	ナ シ	p. 41 家庭生活	p. 42 ナ シ

※ 〈 〉は関係表現

中村正直訳では「生活」という用語の使用はこの部分では見られないが、明治39年の畔上訳では忠実に今日使用している「生活」表現を多用し、訳語的に定着している。小山内・中村共訳本はこの部分では畔上訳より少ない。いま一つ第十章をとりあげてみる。表示すると次の如くである。

中村 正直訳	畔上 賢造 訳	小山内・中村徳助共訳
ナリワヒ 目前生活ノ計	p. 471 人をして善き生活をなさしむる	p. 423 同 左
ナ シ	p. 474 労働にて生活する人	p. 426 "
資産ノ中ニ於テ生活	p. 479 収入金額の内にて生活する人	p. 430 "
ナ シ	" 正当に生活する	" "
ナ シ	p. 480 生活及び処弁において	p. 431 "
ナ シ	p. 483 吾人が生活	p. 434 "
ナ シ	" 生活の方法	" "
吾ガ生活ノ情状	p. 485 余の生活の有様	p. 435 "
ナ シ	" 収入以内にて生活	" "
ナ シ	" 英国生活	p. 436 "
ナリワヒ 生活ヲ為ス	p. 486 収入一杯に生活	p. 436 "
ナ シ	" 華奢なる生活	p. 437 "
ナ シ	" かかる生活	" "
ナ シ	p. 487 放蕩の生活	p. 438 "
ナ シ	p. 488 収入以上の生活	" "
ナ シ	p. 488 軍人の生活	" "
ナ シ	p. 490 正直なる生活	p. 441 "
ナ シ	p. 494 自己の生活、単に動物的賤役の生活	p. 444 "
ナ シ	p. 497 他人の生活	p. 446 "
ナ シ	p. 500 生活行動	p. 449 "
ナ シ	p. 501 利己的生活	" "
ナ シ	p. 505 人間の職分とを最も多くなせし生活	p. 453 "

中村正直訳は数回の「生活」表現を用うるのみでしかもナリワヒと訓読させている。これに対して畔上訳は全部を第一章と同様に「生活」という表現を与えている。小山内・中

村共訳本は畔上訳とここの部分は全く同じ表現である。してみると「生活」という用語をもって表現しなければならない思想内容の把握は畔上訳ではほぼ完了していたことになる。

第一章では少なく第十章では同様の使用を示した小山内・中村共訳本は両者を対比してみると表現上次のような特色をもっている。

第一章冒頭の部分と第十章の冒頭の部分の対比を行いながら考察してみる。

畔上

『天は自ら助くるものを助く』こは実験によりて正確疑ふべからざる格言にして、語短なりと雖も、尨然たる人間経験の結果を體現し尽して余蘊なし³⁴⁾。

小山内・中村

『神様は他人の力を借りないで独力で稼いで行く人に幸する』と云ふ格言は簡単にして且つ適格な言葉である³⁵⁾。

ここの両者の異いは畔上が中村正直訳を受けて翻訳し直す際に「(原文に) 極めて忠実に……努めた」と言っている通り、直訳体でしかも「原著者の精神」³⁶⁾を伝えようとした特色と、「元文の梯を髣髴せしむるに止るを遺憾とす³⁷⁾」と意識体をなした小山内本の性格の異りである。ところが第十章の次の両文となると奇妙な性格が現われる。

畔上

人が金銭を取扱ふ仕方一即ち之を儲け之を貯え、之を費す遣ローを見るは、其人が実行の知識の如何を知る最良の法なり。金銭を以て人生の主要なる一目的となすは決して正当ならずと雖も金銭は身体の便安と社会の安寧とを計る方法となること大にして決して哲学的輕蔑をなすべき瑣細の物にあらず。まことに人生の最美なる性能にして金銭の正用と密接に関係するものあり。例へば寛大、正直、誠実、犠牲の精神及び勤儉、予備の實際道德の如き是なり。之に反して不正なる金銭の欲を抱くものは、右等性能の反対なる貪婪、詐偽、不正、私欲等をあらはす。又其資財を誤用し濫用するものは不勤儉、奢侈、不用意等の悪徳をあらはす。さればヘンリー・テラーは其思考深き書『人生の註解』に於て名言を吐いて曰く「金を儲け貯へ、費し、与へ、取り、貸し、借り、遣すことの正しき人は完全なる人と思ひて大差なからん」と³⁸⁾。

以上に対応する小山内・中村本では「便安」を「保安」に「正用」を「利用」に換えただけで全く同じ文である。畔上本の部分訂正という形である。ここでは小山内・中村共訳(?)の示す奇妙さの因には立ち入らず、畔上本に多大の影響を受けた一例としておく。

34) 同上 1頁。

35) 賀集文楽堂、大正6年、1頁。

36) 前掲 畔上訳本 例言。

37) 前掲 小山内共訳本 凡例。

38) 前掲 畔上訳本 468~469頁。

以上の考察で中村敬宇（正直）において充分把握されなかった〈諸概念〉が畔上賢造あたりで完全に把握されてくることが予想される。

3 畔上訳『自助論』と時代思潮

「生活」用語表現を翻訳語として定着させるという事はその時代にそうした用語で示さなければならない思想が拡大していたという事である。

日本において「生活」思想が明確に自覚されてくるのは明治20年代徳富蘇峰、山路愛山、国木田独步、宮崎湖処子等においてであり、この点は前稿³⁹⁾においても述べた。それ際合せて「生活」の自覚は国民の産業社会人としての自立と関係する事も指摘した。

畔上訳『自助論』*（明治39年）が「生活」を完全に訳述した事は当然産業社会に必要ないくつかの概念をも明確に把握していたことをも予想させる。そこで中村正直訳と畔上訳とを比較してみる。第二章から例文を引用する。

原文

Inventors have set in motion some of the greatest industries of the world. To them society owes many of its chief necessities, comforts, and luxuries; and by their genius and labour daily life has been rendered in all respects more easy as well as enjoyable. Our food, our clothing, the furniture of our homes, the glass which admits the light to our dwellings at the same time that it excludes the cold, the gas which illuminates our streets, our means of locomotion by land and sea, the tools by which our various articles of necessity and luxury are fabricated, have been the result of the labour and ingenuity of many men and many minds. Mankind at large are all the happier for such inventions, and are every day reaping the benefit of them in an increase of individual well-being as well as of public enjoyment.

Though the invention of the working steam-engine — the king of machines — belongs, comparatively speaking, to our own epoch, the Idea of it was born many centuries ago.⁴⁰⁾

中村

新巧ノ機器ヲ發明スル人アルニ由テ 世界上ノ工業ヲシテ活潑盛大ナラシメタリ。コレ等ノ人ノ智思ヲ運シ勞事ヲ忍ベルニ由テ民生必需ノ器用及ビ便利快適ノ具容易ニ造リ出サレ 天下ノ人コレニ由テ安樂康寧ノ福ヲ消受スルコトヲ得タリ 試ニ思ヘ吾等ノ飲食

* この訳本は後、松本商会出版部より大正6年十七版を発行している。

39) 「明治における江戸洋学観の展開」『アルテスリベラレス』Vol. 29, 昭和56年12月。

40) 前掲 1958版 p. 59~60.

衣服家中ノ什物ヲ始メトシテ ビードロノ室中ニ光ヲ納レ 寒氣ヲ外ニ鎖スモノ街氣ノ街行ヲ照スモノ 蒸氣行動機器ノ水程陸路トモノ人物ヲ輸送セルモノ需要ノ什物並ビニ耳目ヲ怡シメ身カ智思ニ由リテ現出セル結果結果効驗ナリ 蓋シカクノ如キ創造者アルニ由リ 民生各箇ノ福利并ニ邦国一般ノ文運日々に増盛スルコトナリ。蒸氣機器ハ機器ノ王ナリ コノ發明創造ハ近世ノ事ト雖モ然レドモコレヲ作ラント思ヒ起セシ人ハ数百年前ヨリシテ既ニコレアリシナリ⁴¹⁾。

畔上

發明家にして世界最大の工業を創めたる人々あり。社会は其必需品、安楽、愉快の多数を彼等に負へり。彼等の天才と勤勞とによりて吾人の日常生活は総ての点に於て安楽愉快になれり。吾人の飲食、衣服、家具、住家に光線を入れ且つ外部の寒氣を防ぐ玻璃、街路を照らす瓦斯汽車汽船雑多の必需品奢侈品を製造する器械等、凡て皆多数天才の人が勤勞せる結果なり。凡て人類はかかる發明ありし為めに幸福となれり、而して之がために個人の幸福も社会の快樂も日々増殖しつつあり。機器の王とも稱すべき蒸氣機関の發明は寧ろ現代に属すと雖も其發明の思想は数世紀前に生れたり⁴²⁾。

中村には「社会」(Society) という概念が不明である。他の部分で「社中」とか「会社」と訳した例があるが充分把握されていない⁴³⁾。と同様に「公共」(public) という概念も不明である。畔上はそれを「社会」「社会公衆」と訳しているのは市民社会への理解を有していたことを物語る。次に蒸氣機関に代表される産業技術の革進が畔上では同時代的意識で把握されているのに対して中村では弱い。こうした産業革新が「人類」(Mankind) の幸福につながるとする畔上に対して、中村は「邦国一般」と訳して「人類」概念をはっきりしない。(Humanを「人類」と記した所もあるが一定していない。)

更に重要な事は畔上は 'the Idea of invention' を「發明の思想」と訳し中村は「思ヒ起ス」と訳している。この事は単なる表現上の相違にとどまらない(中村も「思想」という表現を用いた所もあるが⁴⁴⁾)「思想」そのものの理解が一定せず 'the same idea is usually found floating about in many mind'⁴⁵⁾ などは訳し切れない。畔上は「(凡そ工業の要求が發明家の工夫を求むる時は) 同一の思想が多人数の心に浮ぶものなり」と訳し、スマイルズの原文のもつ単なる技術史的内容を越えた産業技術思想史的な意味をも理解しよう

41) 21) 使用本「第二編」引用。

42) 前掲 畔上訳本 45 頁。

43) 中村は「西国立志編」で London missionary society を「倫敦ミッショナリー会社」、Royal society を「学士ノ会社」thier society を「彼等ノ社中」wealth and high social position を「富貴ノ家」等と訳している。中村が明治4年に訳した J.S. mill の "On Liberty" 訳名『自由之理』の場合 society を「仲間連中即チ政府」と訳している事が指摘され、「明治初年の翻訳者をこまらせたようだが、ここで政府と訳してしまつてはミルが世論の専制に対してたたかおうとしている時、その目標があいまいになる」との批評がある。(水田洋解説『世界の大思想』河出書房昭和42年。)

44) 『西国立志編』でも『自由之理』でも「思想」という訳語を用いている。しかし、一定していない。

45) 前掲 1958 年版 p. 63.

としている⁴⁶⁾。

ところでこうした中村の受容は勿論中村個人の問題というよりは時代の問題であった。前稿で述べた藤田茂吉は『文明東漸史』において、西洋より伝来する科学技術的知識が「内部ヨリ人心ヲ動カシテ、新思想ヲ發育スルノ道」として洋学を把えた。そこでは「思想」が天保期の尚歯会にみられるような知識人の集まりの間に共通認識として確認されるものという観方が提示され、そうした共通に確認されたものが「力」となって歴史を動かすと観られていた。そのため茂吉はこうした「思想」を現実の政治活動と結びつけていった。

つまり、明治10年代は政治家や官吏、学者といった自立目標に主流があり「思想」はその手段という形をとった。中村が『自助論』を翻訳し『西国立志編』として出版し、多大の愛読者をもったが、前田愛氏の指摘する如く産業技術的記述には興味を示さなかった⁴⁷⁾。いわゆる「立身出世」のための書として受けとめたのである。

かかる時代であったために中村の訳が一応科学や工業や技術に関して及ぶ限り訳述していても、そうした社会を現出せしめる生活や「思想」へは十分な認識を伴わなかったのである。

畔上訳『自助論』が成立するにはすでにその前に産業社会への進展やそれを支える「思想」が用意されていた。『新日本之青年』を明治18年に執筆し、更に『将来之日本』を翌年脱稿した徳富蘇峰は国民の「生活的教育」を唱え「生産機関の発達した国」づくりを説いたが、そこでは、

(1)原因結果の応報の熟知 (2)自尊自愛の気象 (3)自動的教育 (4)同情の念 (5)自由主義社会の道義の導入 (6)私立学校の設立等をもって「知識界第二世革命」を遂行しようとした⁴⁸⁾。

この(5)においては特に、「愛国の精神、剛毅大胆の意志・心腸、労作、精勉の気象等の市民的道德の涵養が説かれ……『自助論』や『品行論』の道德をもつての」教育が力説された⁴⁹⁾。この明治20年代における民友社の思想こそ、スマイルズ『自助論』の思想をそのものとして受けとめてきていたのである。時あたかも日本における産業革命は徐々に進行しつつあったのであり、畔上訳が出た時にはほぼ日本の産業革命は終了していたのである。

46) D.S.L カードウェル 金子務訳『技術・科学・歴史』によると、技術史は100年にわたってサムエル・スマイルズの影響下にあったというが、日本で戦前の教科書にのったワット、フランクリン、ジェンナー、リビングストン等も全て『西国立志編』の影響下にあった。

47) 前掲 前田論文

48) 源了圓氏「徳富蘇峰と有賀長雄におけるスペンサーの社会思想の受容」『東北大学日本文化研究所研究報告』第14号 1978.3. 32頁。

49) 『徳富蘇峰集』近代日本思想大系8 所収本 筑摩書房 1978.6. 55頁。